

【議事要旨】 第1回横浜市立特別支援学校（肢体不自由）教育推進検討会	
日時	平成29年11月28日（火） 18時00分～20時20分
場所	関内駅前第一ビル 302会議室
出席者 (敬称略)	(委員) 学識経験者、医療・福祉関係者、学校関係者、保護者会関係者 計7名 (事務局) 教育長、教育次長 他5名
発言要旨	<p>(全体進行) 小泉課長 (吉田首席指導主事) 資料を元に事務局から主旨説明。</p> <p>【以下、発言要旨】</p> <p>委員 最初に保護者への説明がなかったため、ボタンが掛け違った。重度の子には急変がある。教育の前に命が大切。適切な判断ができる者が学校に必要。重度の子にとって大切な学校であり、小学校と併置で他にない学校なので大切にしてほしい。</p> <p>委員 遠くに行けない重症の子にとって大切な学校。教育の充実イコール色々な子を混ぜることとは思わない。周辺の学校までは遠い。北綱島を無くしてはまずいのでは。</p> <p>委員 2008年生まれの重心児が来年は1年生となる。大幅に増える予想。対応する必要がある。 左近山まで周辺の区からは遠い。しかし小学校の通学区はおおむね4km、中学校は6km。障害のある子も同様な距離で地域の学校に通うことができる合理的配慮が必要ではないか。 現状の学校で対応できない人工呼吸器ケア児が増えている。手厚い看護師配置の必要がある。スクールバスに乗れないことや、さまざまな保護者の負担も問題。</p> <p>委員 全国的にみると、学校での医療的ケアへ対応は、横浜の特別支援学校でスタートした。小学校と併設で「ミニ4校」と呼ばれ、教職員の目もよく届いていた。再編整備は重度の子にとってメリット無いのでは。北綱島は地域との関係も良い。あえて地域の見えない左近山へ行くのではなく、重度の子は近くに通うのがよい。</p> <p>委員 地域の障害のある子を小中学校でどう受け入れていくのか話を聞きたい。市の中で、肢体不自由部門のある学校が、どのようなセンター的機能を果たしていくのか。障害者差別解消法で、合理的配慮が求められるが、その前の環境整備をどうするか。北部に学校がなくなるとそれが低下する。分教室がああ地域でどのような役割を果たすのか見えてこない。 児童生徒を受け入れる立場も、送り出す立場も校長として経験したが、いつも保護者は不安。その気持ちに寄り添うことが大切。</p> <p>委員 横浜が昔から医療的ケアに対応してくれていたもので、中途障害の息子も高等部に通うことができた。北綱島の保護者が「預ける場所がなくなるのでは」と不安に思う気持ちはわかる。しかし、北綱島の現状はあまりにも狭い。物理的に無理なことは決断しないといけない。 だが、これまでの経緯では保護者との議論が足りない。今後は教訓にして、夢を共有してほしい。長期、中期、短期の計画を念頭に、県とも十分に連携してほしい。</p> <p>委員</p>

北綱島は狭く、以前から移転を要望してきた。過密化を何とかしてほしいと思っている。ただ、北綱島を無くして、重たい子が他へ1時間の通学をするというのは無理。もう1校建ててほしい。神奈川全体の肢体不自由校が安定する。そして1校できるまでは左近山が分教室ということでどうか。長期的視点では、特別支援学校は重度の障害のある子、それ以外は地域の小、中学校で受け入れていくのはどうか。

事務局説明

- ・左近山へ北綱島の子が通うことはない。北綱島は分教室という形で新入生を受け入れ、北東部の児童生徒の対応をしていく。
- ・地域の小中学校には100名前後の肢体不自由の子がいる。知的障害がなければ一般級、あれば個別支援級に通っている現状。そのため特別支援学校に通学している肢体不自由のある児童生徒は、重度重複障害が多い傾向にある。
- ・スクールバスは現状、医療的ケアが必要な児童生徒の乗車は難しいが、乗車中に医療的ケアが必要ない場合は可能なケースもある。看護師は同乗してないので、頻繁な医療的ケアが必要なお子さんをご遠慮いただいているのが現状。

教育長

川崎市や県を含め議論している。具体的なものを早く示さねばと考えている。吸引等している子も一般級に行けるよう、訪問看護ステーションを使って1校試行している。一般の学校で広く広げるには準備が大変だが、うまくいけば他の学校でもできると考えている。重度の障害がある子の受け入れは、学校の設備や人の対応等でできることはやっていこうとしている。物理的限界はあり全校では無理だが、可能な学校では実施していきたい。

特別支援学校の肢体不自由児の教育は、教育課程の整備をして、重度から軽度の子も一緒に学校で見していきたい。

「今すぐ全部」ではなく、ゆっくり再編していくことが大切と考えている。

北綱島のお子さんについても、他に転校してもらおうとは言っていない。今と同じ場所、状況でしっかり対応していく。ただ、北綱島のハード面では、子どもが過密で危険だったと認識している。近くに移転したかったがそういう状況になかったので、左近山をつくり、全体を調整しながらゆっくり時間をかけて再編していく。一般校ではどのようにしていくか等、中長期的なビジョンをとることだったが、「地域」でみたいと思っている。全部ではないが出来る努力をしていく。10年先を考えると、県との連携が大切。県は多くの障害のある児童生徒が一般校へ入学していくビジョンを出している。市も交流及び共同学習、副学籍をもっとしっかりやっていきたい。横浜市は大いに県から学んでいる。また、県にも市から学んでもらいたいと思っている。

左近山地域は受け入れが非常に良い。他で感じたことがない温かさを伝えていきたい。

北部方面は無視できない。県とどのようにしていくか連携していく。北綱島を分教室としてきっちり残していくということで、フレキシブルにやりたい。

想いを持ってやってきたが伝わらなかったことは申し訳ない。反省している。不安をもっている保護者に「大丈夫です」と伝えていきたい。我々も伝えていくが、機会があったら先生方も保護者に伝えてほしい。

北綱島を分教室とする理由は、市全体で肢体不自由特別支援学校が5校体制としてきたことが一つ。もう一つは分教室という形態の方がフレキシブルにいろいろなことができること。規模は30人くらいを想定している。ただ、今は70人位の規模がある。市で最初の試みとして非常にフレキシブルな体制を想定しているので「分教室」という呼び方が良いかどうかとも検討中。新しい概念を考えている。今までと同じ状況で北綱島がやっていけるようにする。校長不在が不安であれば、管理監督

的な立場の者をしっかり置いておく。

委員

職員や外部各所と連絡調整・監督できる校長が不在の「分教室」はよくない。北綱島を「学校」として残せないか。

委員

校長が不在でも組織は動く。校長が不在の分教室はだめだと伝えて保護者に不安をあおることはやめた方がよい。PTAにも反対だけでなく、今後をどう考えるのかを考えてほしい。

委員

左近山は横浜療育センターも近いしロケーションは悪くない。左近山に学校を作るのは反対ではない。

委員

そもそもなぜ「分教室」なのか。最初に保護者と議論していれば良い形で進んでこれたはず。しかし今後北綱島を宝の山にすべき。反対というばかりでなく。370万都市で重心児はこれからも増える。5校で収めるのが無理なのではないか。左近山を分教室としておき、いずれは「5校プラス1校」の6校設置で計画してはどうか。PTAの人も安心する。その計画なら議員さんも含め、話して回れる。左近山を分教室として新しい試みをする場所にしたらどうか。なぜ6校ではだめなのか。

教育長

特別支援学校や高等学校は県に設置義務があり、県との役割分担があると考え。北部に関しては、県立から川崎市立への児童生徒の移動を見込んだり、県の新設予定があるなどの動きがある中で、関係者と連携しながら調整していく。

委員

これからどうしていくかが大切。県や川崎と連携し、ぜひ「5校プラス1校」でお願いしたい。北綱島より近い左近山を分教室とすれば上菅田とも連携しやすい。

委員

北綱島の閉校期限を外したことは英断。さらに英断し、分教室化の期限も外してはどうか。現状では分教室の規模ではない。人数が減ったら分教室に移行してはどうか。

委員

賛成だが、頭数のみで判断してほしくない。通えない子もいるのだから。

委員

いきなり6校でスタートすることになるのが難しいのでは。やはり左近山を分教室がよいか。なぜ「分校」でなく「分教室」なのか。

教育長

色々規定がある「分校」でなく、フレキシブルに運営できる「分教室」でこれまでにない新しいことを色々していきたいと判断した。